様式Ｂ－２

氏名（本籍）	金野　達也（埼玉県）
学位の種類	博士（保健医療科学）
学位記番号	博甲第 29 号
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	保健医療科学研究科
学位論文題目	プロサッカー選手引退後の作業的移行 ～仕事間の意味と機能のつながりから理解する～

学位審査委員

主査	茨城県立医療大学教授	博士（医　学）	山口　忍
副査	茨城県立医療大学教授	博士（医　学）	白石　英樹
副査	茨城県立医療大学教授	博士（医　学）	六崎　裕高
審査員	元吉備国際大学教授	博士（作業療法学）	港　　美雪

論文の内容の要旨

【背景】仕事に関する作業的移行の研究では、作業療法学においては、仕事をする意味やその仕事を通して得たものを表す機能と，新たな仕事や活動とのつながりが関係していることの報告はあり、それらの知見を基に中高年者を対象として健康問題の発生を防ぐプログラム開発はされている。今後、我が国においてプロサッカー選手は，引退後新たな仕事に就き，再就職移行中に精神的な健康問題が生じる場合が少なくない。多くの支援策が試みられてはいるが，十分な効果が得られておらず，新たな支援策の必要性が指摘されている。スポーツ選手の中でもプロサッカー選手は，若くして引退することから、他の仕事に移行する適応能力が高いと考えられる一方で,元プロサッカー選手の３９％にうつ症状等の精神的な健康問題が生じていることが報告されている。日本人の一般的な発症率が２７％であることからも、プロサッカー選手は引退後に，一般の人よりも精神的な健康問題を生じる危険性があるため早急な対応が必要と考えた。

【目的】プロサッカー選手引退後の作業的移行中の仕事間の意味と機能のつながり方について理解し，スムーズな移行の理由を探索することを目的とし，3 つの研究を行った。第１研究では，元プロサッカー選手の,「プロでサッカーをする」と「サッカー関連の仕事をする」という仕事間で，第 2 研究では,「プロでサッカーをする」と「サッカー関連以外の仕事をする」という仕事間で，仕事の意味と機能にどのようなつながりがあるか

を理解することを目的とした。第 3 研究では，現役プロサッカー選手の「プロでサッカーをする」という仕事の意味と機能を理解し，第 1・2 研究の結果と比較することで，元プロサッカー選手の「プロでサッカーをする」意味と機能の変容についての知見を得ることを目的とした。

【方法】本研究では，スムーズな作業的移行についての示唆を得るために，精神的な健康問題を生じていない人を対象とした。第 1 研究では，サッカー関連の仕事をしている元プロサッカー選手 9 名を対象，第 2 研究では，サッカー関連以外の仕事をしている元プロサッカー選手 10 名を対象とした。第 1・2 研究の両方で，対象者に半構造化インタビューを行い（第 1 研究：平均 77.0±32.4 分，第 2 研究：平均 71.9±10.0 分），継続比較法で分析した．第 3 研究では，現役プロサッカー選手 3 名を対象に，半構造化インタビューを行い（平均 49.7±4.9 分），第 1・2 研究を統合したカテゴリーと比較し分析した。本研究は茨城県立医療大学の倫理委員会の承認を得て行われた（承認番号 620）。

【結果】第 1 研究の結果,「プロでサッカーをする」と「サッカー関連の仕事をする」の両方の仕事で,［サッカー以外の選択肢がない］,［好きなサッカーを仕事にして突き詰める］,［チームで結果を出す］という意味と,［自分の成長］,［沸き起こる感情］,［不安定な仕事］,［特別感］という機能は同じであり,“同じ意味と機能でのつながり”があることが理解された。さらに,「サッカー関連の仕事をする」では，プロでサッカーをしていた時の意味と機能を土台して,［自分がサッカーの価値を高める］,［仕事の主体を切り替え選手達を支援する］,［選手達のモデルになる］という意味と,［サッカーで培われた力の活用］という機能に変化させており,“過去の仕事の意味と機能を土台にしたつながり”もあることが理解された。さらに，これらの仕事間のつながりの構築には，≪プロサッカー界で生き抜く≫という認識が関係していることが理解された。第 2 研究の結果,「プロでサッカーをする」と「サッカー関連以外の仕事をする」の両方で,［自分で結果を出す］,［チームで結果を出す］という意味と,［自分の成長］,［沸き起こる感情］という機能は同じであり,“同じ意味と機能でのつながり”があることが理解された。「サッカー関連以外の仕事をする」では，プロでサッカーをしていた時の意味と機能を土台にして,［自分がサッカーの価値を高める］,［仕事の選択肢を拡大する］,［サッカーと融合できる部分を探索する］,［安定した生活をする］,［多くの人のモデルになる］という意味と,［サッカーで培われた力の活用］という機能に変化させており,“過去の仕事の意味と機能を土台にしたつながり”があることも理解された。これらの仕事間のつながりの構築には，≪サッカーが仕事の軸≫という認識が関係していることが理解された。第 3 研究の結果，現役プロサッカー選手の「プロでサッカーをする」意味と機能は，第 1・2 研究の「プロでサッカーをする」意味や機能のカテゴリーで説明でき，説明できないような概念はなかった。一方で，元プロサッカー選手にはあって，現役選手は語らなかった意味や機能があった。

【考察】仕事に関わらず、元プロサッカー選手は，現在の仕事でもプロでサッカーをしていた時と同じ意味と機能を、また、プロサッカーをしていた時の意味と機能を基盤にして現在の仕事の意味や機能も見出しており、プロでサッカーをすることと現在の仕事

につながりを持っていることが理解できた。そして、これらのつながりが見いだせていることが，スムーズな移行と関係していると考えられた。今後，移行支援をする際に，「プロでサッカーをする」という仕事と新たな仕事の意味や機能のつながりに着目することで，これまでにない新たな支援策に結びつく可能性がある。サッカー関連とサッカー関連以外の仕事でつながりのあった意味や機能は異なっていたため，支援の際には仕事によって異なる配慮が必要である。

審査の結果の要旨

本論文の最終審査は公開審査として，令和 2 年 2 月 3 日に研究発表と質疑応答を行った。その後，審査員 4 名により本研究課の指針に従い 1）創造性・新規性　2）専門領域との関連性　3）論理性　4）信頼性・妥当性　5）論文の表現力　6）倫理的配慮の項目で協議を行った。以下に審査結果の要旨を述べる。

1）創造性・新規性

本研究は，専門性・特殊性が高いプロサッカー選手の再就職移行に伴う現象を，意味と機能のつながりの視点で質的研究によりデータ収集・分析していた。３つの質的研究で構成され，セカンドキャリア支援について作業療法学の視点で導く国内外ともに初めての研究であり創造性・新規性が認められた。

2）専門領域との関連性

作業療法学では，障害がある人の就業や再就職の支援が主であるが，2018 年に国内作業療法の定義が改定され「人々が作業を通して健康を促進できるよう，作業的知識を根拠として介入する」ことが明確に示された。プロサッカー選手という健康度・専門性が高い人々のセカンドキャリアで生じる精神的な健康問題の予防に着眼した本研究は，予防的作業療法という点において作業療法学の発展に寄与すると考えられる。

3）論理性

プロサッカー選手の引退後の作業的移行に関して、仕事間の意味と機能のつながりを理解し、スムーズな移行理由を考察するために、3 つの研究で構成されていた。それぞれの研究が、プロサッカー選手のスムーズな就業の移行に必要な事柄を示すために必要な研究であると判断される。また、プロサッカー選手という特殊な対象で、複雑な現象を含む新しい領域であることから、プロサッカー選手引退後の 21 例について丁寧に質的研究によりデータ収集が行われており、論理性も整っていた。

研究協力者の属性変数として「移行までの期間」「自発的退職かそうでないか」「サッカーの好き嫌い」「現在の仕事が望んだ仕事だったかどうか」「年収」などの詳しいデータの記載があった方が結果がわかりやすかったとの指摘があった。また、研究課題における「スムーズ」な「移行」の言葉について移行できるまでなのか，定着まで含むのか

などを含む定義の記述が不明瞭でありその点についての考察が必要であった。

4）信頼性・妥当性

質的研究に必要な信憑性の確保は考慮されて行われていた。第 1 研究、第 2 研究は理論的飽和に至っているが．第 3 研究についてはデータ数 3 例と少ないため継続した研究を期待する。今後はさらに，対象者を拡大し，就職移行後の職種別，転職の状況別等による比較分析などを含めて総合的に検討する必要がある。

5）論文の表現力

研究背景や文献レビューが丁寧にかつ適切に記述され、論文の理解しやすさにつながっていた。審査時は研究意義に沿った結論を明瞭に回答していたが、論文中に研究全体の成果の記述が不足していたため「結論」の章立てが必要である。できる限り論文がわかりやすく表現されるよう，図や表で工夫がされており，プレゼンテーションでの説明も明瞭であった。

6）倫理的配慮

本学の倫理委員会の承認を得て、必要な倫理的配慮がなされていた。

本論文は、作業療法学に寄与し、保健医療科学専攻に応じた研究であり本論文が博士論文として適切であることを、主査・副査 2 名・外部審査員 1 名による審査の結果「合格」と判断した。今後の継続した研究により，プロサッカー選手以外の選手にも活用できる汎用度が高いプログラム開発に期待する。